

## English Garden 第68話

"My country is far / Beyond the tumbling of this tide."

W.B. Yeats

「私の国はこの逆巻く海のはるかかなたです」

W.B. イェイツ

今回はW.B. イェイツの "The Wanderings of Oisín" (『アシーンの放浪』)を取り上げます。これは1889年、イェイツが24歳のときにロンドンで出版した処女詩集 "The Wanderings of Oisín and Other Poems" の冒頭に収められている長詩です。イェイツはこのころまでには「ケルト的な神話伝説の清純な美しさを英語で甦らせることによって、真のアイランド文学を打ち立てること」を使命と考えるようになっていました。その意図がよく表わされているのがこの詩集です。

「アシーンの放浪」の主人公であるアシーン(Usheenとも綴る)は、ケルト伝説の文武に秀でた3世紀ごろの英雄で、ケルト的な心情をいちばんよく受け継いでいるといわれるアイランドの農民や漁夫のあいだで人気の高かった人物です。

この詩の中に描かれているのは、「ティル・ナ・ヌオグ(Tir - na - n - Og)」という古代アイランドの精神的な世界で、魂や肉体の美しさが滅びることのない、「老いもせず死にもしない」永世不死の国です。

物語は、三百年を異郷で過ごして戻ってきた年老いたアシーンと 聖パトリックとの対話で始まり、いまだに夢から覚めない様子のアシーンの独白を、時々聖パトリックがたしなめる形で進んでいきます。

老いたアシーンの語るところによると、ある日アシーンは父王と従者と狩りに出たとき、海辺で馬に乗った美しい高貴な女性に会いました。どこから来たのかたずねた王に娘が答えたのが冒頭の言葉です。自己紹介をするその前の部分をもう少し引用します。

'My father and my mother are / Aengus and Edain, my own name  
Niamh, and my country far / Beyond the tumbling of this tide.'

私の父はアングス、母はエドイン、私の名前はニアヴです。  
私の国はこの逆巻く海のはるかかなたです

アングス(Aengus)は青春と詩歌を司るケルト神話の神で、ニアヴ(Niamh)と名乗るこの女性は永遠の青春の国の女王なものでした。この詩では特異で美しいイメージが多く使われていますので、それらをご紹介しながら話を進めることにします。まず、この王女の描写です。

A pearl-pale, high-born lady...  
真珠のように白い肌の高貴な乙女...  
And like a sunset were her lips,  
そのくちびりはあらしの合間に  
A stormy sunset on doomed ships;  
難破船を照らす夕日のような色だった。

「難破船を照らす夕日のような色のくちびり」というショッキングな比喻により、主人公の運命が暗示されます。このあとニアヴは、アシーンの数々の武勇伝に心をときめかせていたことを告げ、永遠の国と一緒にいるようにと誘うと、アシーンはたちまち恋のとりこになって、父王たちが止めるのも聞かずに馬に乗って人間の国を後にしていきます。

We galloped; now a hornless deer  
Passed by us, chased by a phantom hound  
All pearly white, save one red ear;  
And now a lady rode like the wind  
With an apple of gold in her tossing hand;  
And a beautiful young man followed behind  
With quenchless gaze and fluttering hair.  
私たちは馬を走らせた。角のない鹿がそばを通り  
全身が真珠のように白く  
片耳が赤い幻の猟犬が後を追った  
こんどは金色のりんごを捧げ持った少女が  
風のように馬で走り去ると  
美しい若者が目を輝かせ、髪をなびかせて  
少女の後を追っていった

日が沈み、薄明の中をなおも駆けていくと、陸の風が吹いてきてたくさんの木が見えてきました。どの木も揺れています。近寄ってみると、枝を揺らしているのは鳥たちでした。

Round every branch the song-bird flew,  
Or clung thereon like swarming bees:  
どの枝にも鳥がさえぎりながら飛び交ったり  
ハチのように群がったりしていた

二人がまず到着したのは、「舞踏の島(Island of Dancing)」でした。ここでは鳥は楽しげに歌い、木はバラ色の花をつけ、黄金の果実



を突かせます。人間の世界でいちばん楽しい歌も、ここでは悲しげに聞こえるのです。アシーンはニーアヴを妻とし、「時と運命と偶然をあざけて(We mocked at Time and Fate and Chance)」、恋と歌と舞踏に時を忘れ、百年を過ごしました。

(次回に続く)

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。